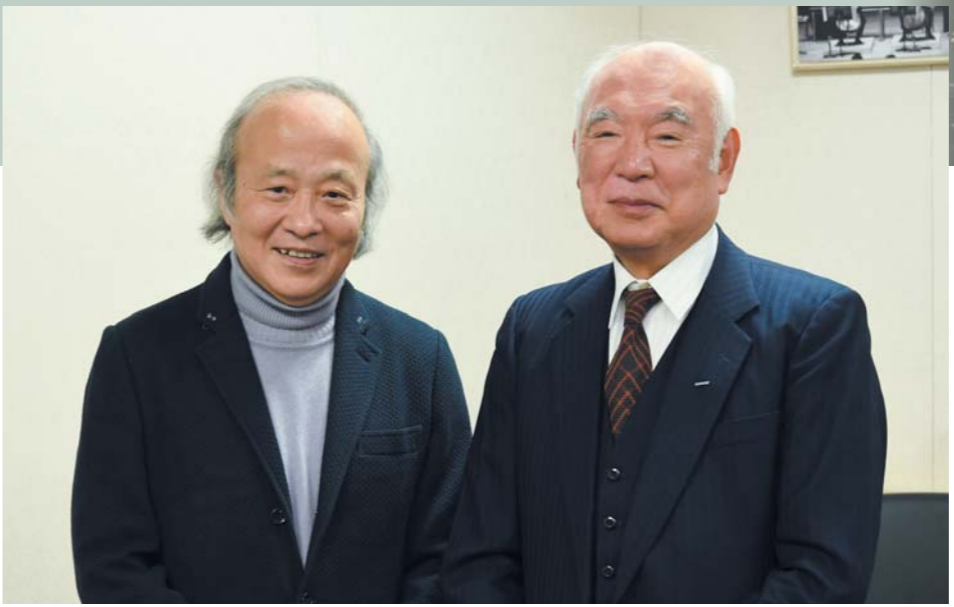




サントリーホール

インタビュー

「第九回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の開催によって、さらにクラシック音楽界が盛り上がり、日本全体の活性化につながることができれば素晴らしい！」



左:尾高忠明さん 右:堤 剛さん

いよいよ開催が目前に迫った「第九回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」。このコンクールにおいて審査委員長を務められる世界的チェリストの堤剛氏と、この春から大阪フィルハーモニー交響楽団のミュージックアドバイザーとなられ、来年には音楽監督に就任される指揮者の尾高忠明氏のお二人にお話を伺うことに。日本室内楽振興財団の常務理事、牧野立太氏がサントリーホールの館長室を訪ね、室内楽の魅力やそれぞれの交流、コンクールへの思いなどをお聞きして大いに盛り上がりました。

齋藤秀雄先生は生徒が上手くなるためには、全てを捧げるといえるのが根本的部分にあります。たね。——尾高

牧野 本日はお忙しい中、誠に有難うございます。早速ですが、堤さんと尾高さんは、同じ桐朋学園出身で齋藤門下生だったとお伺いしていますか？

尾高 そうです。堤さん

は大先輩で憧れの存在でした。堤 有難うございます。音楽界に齋藤先生の門下生は多く、素晴らしいばかりです。

尾高 齋藤先生はチェロと指揮をなさっていて、その二部門は素晴らしい生徒が育っています。特にチェロ部門では、堤さんを筆頭に、世界で名だたる先鋭



堤さん

チェリストの多くが在籍しておられました。堤さんがNHK交響楽団と初めて世界旅行をされた時、日本人として誇らしい思いで眺めていました。

牧野 なるほど。齋藤先生から学ばれたことは多いですか？
尾高 齋藤先生無くして私たちがありませんよ。厳しい先生でしたが、様々なことを教えていただきました。卒業時、先生に呼ばれて井上道義と一緒に会いに行きました。つぎ卒業祝いのお言葉をいただけるのだ

と思つたら、「君たち二十二、三歳では、音楽は全然わかっていないと思う。三十歳まで仕事はないだろうけど、三十歳になれりうから、ジャズでもポップスでも歌謡曲でも何でもいりから指揮をしない。四十歳になつたら反省を繰り返してさらに練習しなさい。そうすれば、五十歳で初めて指揮者の赤ちゃんとされる」と、そんなお言葉をいただきました(笑)。その後三十歳になり四十歳になった時、先生がおっしゃった通りだとわかりました。だから、五十歳になるのは怖かった。指揮者として、スタートを切るわけですからね。今年七十歳になるので、指揮者としてはやっと二十歳(笑)。そうした齋藤先生の教えはずっと消えない。本当にすごい人です。

堤 私は小学校三年生からずっと齋藤先生に教えていただいていた。その当時からとて「生懸命教えてくださって、知っていることを全部教えていただいたように思います。ただ、その頃はまだ幼くてわからない



尾高さん

ことも多かったのですが、後になつて、先生がおっしゃっていたのは、こういうことだったのかと改めて思うことが多々あります。よく怒られたし、厳しい先生でしたが、それでもついていけたのは、先生の情熱に惹かれたというか…。

尾高 情熱プラス愛情があつて、生徒が上手くなるためには、全てを捧げるといえるのが根本的部分にあります。たね。

尾高 先生とのアメリカ旅行を計画していた時、先生の病気が発覚し、余命三カ月と聞いて、旅行をキャンセルしたのですが、先生は行く気満々だった。合宿も参加されるつもりで、「遠方だから私たちに任せてください」とお話ししたのですが「ダメだ！合宿は大事だ！お前らには任せられない」と。仕方ないから「それでは場所を近場に変更して合宿をしましょう。

それなら病院も近い」と提案すると「ダメだ！あの空気のいい場所で温泉に浸かり、美味いものを食べるという環境の中で、子ども達に教えるのが合宿なんだから」と言つて引かない。説得に説得を重ねてなんとか辞退していただきましたが、結局それは先生の最後の嘘でした…。

牧野 嘘といえますか？

尾高 私たちが合宿所に到着した時、齋藤先生がこちらに向かっているという連絡があつたんです。夜中に到着されたのですが、腹水で腹部が異常に腫れた状態で、翌朝には帰っていた。こうと皆で話し合っていたのですが、翌朝、奇跡的に元気になる。「指揮をする！」と。全員で驚いて止めたのですが「俺はやる！」と歩も引かない。仕方がないので、車椅子を指揮台にして、モーターとチャイコフスキーを指揮していただきました。チャイコフスキーを指揮する時には手を上げることができなくて、子ども達に「手が上がらなくて申し訳ない」と謝るんですよ。そんな状態で五

日間教えてくださった後、東京に戻られて約二週間で亡くなりました。

牧野 そうなんですか…。

尾高 後からわかつたのですが、お医者様は「合宿に行けば命はない」と止めたそうですが、「命に代えてもしなくてはならない時がある。それが今なんだ！」と言われたそうです。まさしく死を覚悟で来られた。そこまで学生を、そして、教えることを愛してたんですね。



牧野さん

尾高 「人間としてしっかりせよ！」ともよく言われた。「素晴らしい音楽家・演奏家である前に、素晴らしい人間であれ」と。先生自身ヘビースモーカーでしたが、合奏室では絶対に吸わないと、しっかりけじめを守つてらっしゃいましたね。

堤 先生の自宅でレッスンを受けていたのですが、くわえ煙草

PROFILE 敬称略

【牧野 立太】(インタビュー) 公益財団法人日本室内楽振興財団 常務理事

【堤 剛】(チェロ) 名実ともに日本を代表するチェリスト。桐朋学園子供のための音楽教室、桐朋学園高校音楽科を通じ齋藤秀雄に師事。1961年アメリカンインディアナ大学に留学、ヤーノシュ・シュタルケルに師事。1963年ミュンヘン国際コンクール第2位、カザルス国際コンクール第1位入賞。2009年秋の紫綬褒章を受章。2013年、文化功労者に選出。(パッサ・無伴奏チェロ組曲全曲)など録音多数。1988年より2006年までインディアナ大学の教授を務め、2004年より2013年まで桐朋学園大学学長を務めた。2007年9月、サントリーホール館長に就任。

【尾高 忠明】(指揮者) 現在NHK響正指揮者、BBCウェールズ・ナショナル管絃指揮者、札幌響名誉音楽監督、東京フィル桂冠指揮者、読売日響名誉客演指揮者、紀尾井シフォニエッタ東京桂冠名誉指揮者を務める世界的指揮者。91年度サントリー音楽賞受賞。97年英国エリザベス女王より大英勳章CBEを、99年には英国エルガー協会より日本人初のエルガー・メダルを授与された。2012年有馬賞(NHK交響楽団)、14年北海道文化賞受賞。東京藝術大学名誉教授、相愛大学、京都市立芸術大学客員教授、国立音楽大学招聘教授。

でチェロを弾かれるので、ポタポタと灰が落ちる。それがチェロのf字孔のところに入っていくんですね。チェロが焦げるのではないかとヒヤヒヤして見てましたよ(笑)。その後、先生がチェロを調整に出された時、楽器店の方がチェロをひっくり返すと灰がポロポロ出てきた(笑)。それでみんな「このチェロは灰が入っていた方が良い音がしていたね」と冗談言って笑い合いました(笑)。そんなユニークな逸話も残っています。

尾高 その後、チェロと指揮だけではダメだとオーケストラも教えてくださるようになり、民音が指揮者コンクールを始めた時には、声楽と室内楽の教育も始められた…。

牧野 そのように音楽の世界



を広げていかれたのですね。

海外で学んだことを日本で教え、音楽レベルを上げる流れを作っておられる。——**牧野**

牧野 ところで、お二人はチェリストと指揮者と、違った道を歩まれたわけですが、ご一緒にすることは多かったですか？

堤 もちろん、いろいろとご一緒させていただいています。東京フィルハーモニー交響楽団が世界旅行をした時や、パリでの武満徹のコンチェルトの世界初演やチェコで二緒したりと…。

尾高 相愛のオーケストラもご一緒していただきましたしね。二緒していただけますね。

堤 そうですね。いろいろな演奏で二緒していますね。

牧野 尾高さんは毎年年末にチャリティーコンサートを開催されるそうですが…。

尾高 知的障害の子どもたちを支援する家内の親友が「音楽を聴かせると情緒的にとっても良い」と話していたので、私も何かしようと考えて十年ほど前から、家内がピアノ、兄が作曲とピアノ、兄嫁が歌を担当

お父様の影響が非常に強いと思いますよ。「尾高賞」というお名前も残っていますが、それは本当に素晴らしいことですね。

尾高 父は私が三歳の頃に亡くなりましたから、何も覚えていませんが、NHK交響楽団の楽員さんが、よく父の話を聞かせてくださいました。先ほどの齋藤先生は、私が桐朋学園に入学するまで、たまに父の話をしてくださっていたのですが、私の入学が決まると、死ぬまで一切、父の話はされませんでした。他の先生から聞いたのが「七光りを味わわせるな」とおっしゃっていたそうです。

牧野 それも愛情ですね。

堤 「最近日本の音楽界は先生方のおかげでレベルが非常に上がりましたね」と齋藤先生に言ったことがあるのですが、その時「日本の音楽界が本当に素晴らしいのは、今の若い人たちが留学して得たものを日本に持ち帰り、教えるようになって初めて本当に素晴らしいものになる」とおっしゃいました。そうした長いスパンで物事を考える方なのだと感じましたね。

当し、有志の友人たちと共にコンサートを開催するようになりました。堤さんの奥様が来られた時「主人にも参加させたい」とおっしゃってください、チェロ協会会長である堤さんと副会長の堀了介さん、堀さんの娘さんの三名が参加して下さって素晴らしいコンサートとなったことあります。お客様も絶賛でしたね。

牧野 そんなおつきあいがあったんですね。ところで、尾高さんは今年四月から、大阪フィルハーモニー交響楽団のミュージックアドバイザーとなられ、いよいよ来年からは音楽監督に就任される予定ですが、親友の井上道義さんからのパトロンタッチ就任でもありますし、何か特別な思いはありますか？

尾高 大阪は大好きな街です。相愛学園にも教えに行っていますし、家内は昔屋出身ですから、もともと関西とは縁があるように思います。大阪フィルハーモニー交響楽団というと、私にとつては朝比奈隆先生の印象が強い。個人的にも様々なこと

牧野 お二人はまさしく、海外で学んだことを日本で教えておられますから、そういう流れができてきますよね。

尾高 クラシック音楽が発展した時、日本は鎖国中でした。欧米人のレベルがどんどん上がっている時に、ゼロから始めなくてはならなかったのはリスクだったと思いますね。

お互いを聴き合う、あるいは話し合うような部分が魅力のひとつ。——**堤**

牧野 ところでお二人は、室内楽は、どのようなものだと捉えておられますか？

尾高 クラシック音楽には、ピアノソロやトリオ、クアルテット、オーケストラ、オペラなどがあります。でもやはり、音楽の原点はクアルテットだと思うんですね。ウィーンフィルの人と話す時「我々がすごいのは何組でもストリング・クアルテットができることだ」と言います。それはどのオーケストラにとつても基本で、オーケストラの根幹には室内楽があることが絶大だ

を教えてくださいました。大阪フィルハーモニー交響楽団を

ゼロから作り、素晴らしいオーケストラに育てられた功績は見事だと思います。毎年必ず一度は指揮に行き、昨年三月にも参加してラフマニノフの二番を指揮しました。その時の大阪フィルハーモニー交響楽団の演奏が秀逸で、さすが関西の老舗オーケストラは違うと感心しました。

親友である井上道義が、これからもどんどん引張っていくと思っていれば、辞めると聞いて驚いた。そして私に引き継ぎの話がやってきて、さらに驚きました。せっかくお話をいただいたのですが、二〇一七年のスケジュールはすでに決まっていたため、来年の就任となり、音楽監督就任までの間は、音楽のアドバイザーを担わせていただくことに。朝比奈先生が作られたオーケストラを、親友から受け継ぐことに関しては、いまだ怖さもあるのですが、指揮者としてそろそろ二十歳を迎えますし、できるだけのことをやってみたいと思っています。

牧野 井上大阪フィルハーモ

と思います。そうした場合、指揮者がなくてもできるんですよ。シエーンベルクの「浄夜」は、六十名の大編成で演奏する濃密で官能的な曲なのですが、それは六重奏が元になっています。田中千香士先生とご一緒した時にNHK交響楽団のオリジナルの六人で演奏してみたいとおっしゃって、実際にやってみました。すると「浄夜」の厳しさが前面に出てきて感動的な演奏になったんです。やはりオーケストラの原点は室内楽だと感じましたね。

堤 弦楽四重奏も室内楽も、まずはスコアを勉強しなくてはいけない。自分のパートだけ弾けてもどうしようもないですからね。自分が弾いている時、他のパートの人がどうしているのかを探るといって聴く姿勢が非常に重要です。最近の日本のオーケストラは本当に素晴らしいけれど、ウィーンフィルやベルリンフィルと違うのは、彼らは室内楽をちゃんと聴いて創ることができていることなんだと思います。だから、指揮者がインスパイアすると、スツとできる。そ

んな時に管楽器の音程が合うというの、やはり室内楽を経験していないとできないと思います。最近では日本のオーケストラも室内楽に力を入れ始め、そういう意味では非常に良くなってきました。ただ、ヨーロッパのオーケストラと比べると「聴いて創る」という部分が弱いと思いますね。

牧野 堤さんはこのサントリールホールで室内楽アカデミーを実施しておられますが、それはどのような部分が大それたこととおられるからですか？

堤 そうですね。やはり音楽事情が熟成していくにつれ、原点となってくるのは室内楽ではないかと感じます。

牧野 お互いを聴き合う、あるいは話し合うような部分が魅力のひとつなのでしょうね。

堤 私は小学四年生から桐朋学園のプレスクールのような教室に入ったのですが、オーケストラに入ると同時に室内楽も学びました。チェロのソロも習いましたが、とにかくアンサンブルを叩き込まれました。先生方はいかに室内楽が面白いかを教

えてくださったので、室内楽は面白いという印象が強くなりましたね。

コンクールは、いつも到達点ではなく、出発点だったと考えていました。——堤

牧野 我々が五月に開催する「第九回室内楽コンクール&フェスタ」において、堤さんには審査委員長を務めていただいております。尾高さんも国内外のコンクールで審査員をされていますが、コンクールに関しては、どのようなお考えがあるのでしょうか？

堤 私はいつも受ける人たちに「コンクールは自分に対するチャレンジだ」と話しています。いかに自分を伸ばせるかが課題だと考えますが、室内楽においては、自分だけでなく、互いに力を合わせて演奏する曲を、どこまでレベルアップできるかと努力することで、より豊かなものが生まれるのではないかと期待しますね。

尾高 コンクールは必要だと思います。必要だけでも、結果で合せているだけではなく、その人がどのような音楽を弾こうとしているのかを見極め、それとどう協調していくかを考えられるというオーケストラの素晴らしさは、測り知れないものがありますね。

牧野 そうですね。

尾高 ある演奏会で二緒したオーボエのガブリエルさんとお話をしていた時に「イタリア人指揮でオペラをするのは良いね」というと「でもね、二幕である指揮者はこう振った。あれはドラマからいくとおかしいんだ」と言うわけです。指揮者が見過ごしている部分を、演奏しているメンバーが見極めていく。すごいなあと感じましたよ。

牧野 室内楽のように、ちゃんと音を聴き合っているというわけですね。

尾高 日本の室内楽やオーケストラは、もともとヨーロッパのお客様の前で演奏する機会があった方が良く思うし、日本の指揮者も外国の指揮者からものと刺激を受けるべきだと思いますね。

は必ずしも正しいわけではないように思う。例えば、世界中のコンクールで一位になった人が活躍している、入選の人が活躍していないかという点、一概には言えない。あくまで人間が判断するものだし、その後その人自身がどう伸びていくかで変わっていくと思いますね。



牧野 なるほど。

尾高 昔はオペラ座に入ってから何年も修行してから徐々に踏み出していくのが二つの道で、それ以外の方法はほとんどなかった。カラヤンコンクールなどが開催されるようになって、今や世界中のオペラハウスではコンクール出身の人がほとんど。どちらが良いかはわかりませんが、問題はコンクールの審査員構成だと思っています。だからこそ、コンクールは審査員選びが難しい。指揮コンクールの場合は、あの素晴らしい音楽は、

震災後、大阪国際室内楽コンクール&フェスタを開催した大阪の力には感激しました。——堤

牧野 ところで、尾高さんはミュージックナドヴァイザー就任と同時に、関西に居を構えるそうですね。

尾高 オーケストラのメンバーと同じ原点に立って、共に仕事をしたいという思いがあるんです。

牧野 尾高さんも関西に来られますし、「第九回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」も開催されますし、春は音楽シーンに良い刺激があるように思えますね。

堤 その大阪国際室内楽コンクール&フェスタで一番感激したのは二〇二二年のこと。震災直後にも関わらず開催しましたよね。参加者もほぼ開催はあきらめていたのに、なんとか開催した大阪の力には感激しましたね。

尾高 あの年は本当に大変でした。ちょうど私は新国立劇場の監督だったのですが、翌日から続々とキャンセルになって

あの指揮者によるものか、もしくはオーケストラによるものなのかという判断も非常に難しいですね。

牧野 コンクールは、ひとつのきっかけになるでしょうね。

堤 そうですね。若い頃、よくコンクールを受けましたが、そこはいつも到達点ではなく、出発点だったと考えていました。

牧野 そうした出発点から、音楽は様々な形に発展してくんできますね。

留学生活の経験は、人間性のどこかをふくよかにしてくれるように思う。——尾高

堤 尾高さんはウィーンに留学して様々なことを学ばれましたが、成長するためには、そのように脳を活性化するのも重要なことですね。

尾高 海外に行きたかったのは、やはり父が音楽家だった影響もあると思いますが、それよりも、ウィーンという街で、食べて飲んで、あの空気の中でウィーン国立オペラを見て、ウィーンフィルを聴いて、ポーリ

ー。新日本フィルハーモニーでローゼンカパリエをする予定だったのに、指揮者や歌手は来ないし、真っ青になりました。なんとか代役を考えて、初日をケネブ口に変え、公演減らして開催しました。初日の公演を終え



た時、舞台裏で、みんな泣いていましたよ。あの時、すかさず開催を決めた大阪の考え方は理にかなっていたと思います。

牧野 そんな大阪からさらに音楽界が盛り上がり、日本全体で活性化できれば素晴らしいですね。私共のコンクールが、そうした力になればと思います。本日は有難うございました。



ニのリサイタルを聴いたという事実が大事だと思ったからです。留学生活での経験は、後々グッと生きてきます。どこがどうとは言えないのですが、人間性のどこかがふくよかになっていくというかな…。

堤 そうですね。

尾高 ゲヴァントハウスで演奏会が始まる前、指揮者室で軽くベートーヴェンのピアノソナタを弾いてみたことがあるのですが、すごく良かった。なのに日本で弾いてみたら、そう大したことではなかった(笑)。そんなものなのかもしれませんね。

堤 そうですね。

尾高 ウィーンフィルがすごいのは、そうした環境と、チェコ人、ハンガリー人、生粋のオーストリア人と、異民族が集まって、互いの弾く音楽をよく聴きながら素晴らしい音楽を奏でるという点ですね。ただ音を聴い